

永遠の営み・・・そして、一期一会

2019.5.5

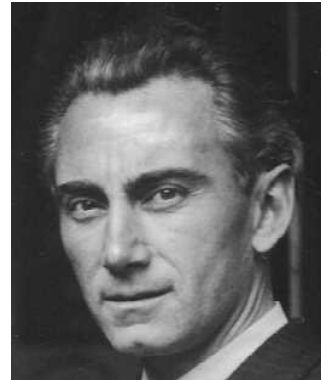
ふとしたことから演奏会のちょっとした読み物にと思いこの「隠国通信」を書き始めた。今回が第10号ということで喜ばしい。といっても、喜ばしいと思っているのは自分だけか……。振り返ってみれば、曲目の解説が主のこともあれば、曲についてのエッセイのようなこともある。もう少し文章力を鍛えねばとも思うのだが、気休めに読んでいただくことでお許しをいただきたい。

この通信、今回のように、昨年11月から半年ぶりに書くこともあれば、月に3本も4本も書くこともあり、その時は「だれがこんなことを考えたんや」と自分をうらめしく思ったりもする。読み返してみると、その時の問題意識、課題意識がわかっておもしろい。同じ速度で時は流れているのだが、その時の自分のどこかが切り取られているようでもある。音楽の活動だってそうで、特にアマチュアの場合は、毎週1回とかという定期的なリハーサルが積み重ねられて本番のステージやコンサートを迎える。定期的な営みであるがゆえに、何だかいつまでも続いていくような錯覚に陥るが、もちろん有限であり、そのリハーサルは「一度きり」である。しかし、その一度きりの次にまた一度きりが約束されているから、安心して過ごせるわけだし、時も季節も緩やかに移ろっていく。

人生には思いもよらないことが起こりうる。いや、思いもよらないことが起こるのだ。しかし、思いもよらないことが起こっても容赦なく時は流れていく。いや、時が何事もなかったかのように流れ、季節がめぐるから、そのことを受け容れていくのかも知れない。うれしいことも悲しいことも少しずつ心の奥に沈んでいく。人はそうやって生きていくのだらう。

この演奏会は、岐阜市で活動するEnsemble Kiiika(アンサンブル キイカ)とEnsemble Clair,Kyoto(アンサンブル クレール、京都)のジョイントコンサートである。指揮者を同じくするグループということで交流もあり、2年前の2017年8月に岐阜サラマンカホールでジョイントコンサートをおこなった。石若雅弥の「夕暮」や「こころの色」、三善晃の「唱歌の四季」を共に歌い、Kiikaは間宮芳

生の「五つのわらべうた」などを、Clairはコダーイやコチャールのマジャーの歌を歌った。その時の成果も踏まえて、2年後の京都での再会を約束したのだった。京都における音楽の殿堂ともいえる府民ホールALTIでの再会は感慨に似た感覚を覚える。



アンリ・トマジ

E.Clairは「コルシカ島の12の歌」より演奏する。この曲は20世紀に指揮者としても活躍したトマジの作曲だが、コルシカ島に伝わる民謡を素材としたもので、技巧的な面はほとんどなく、素朴そのものと言っていい。コルシカ島はフランスの南、イタリアの西に位置する地中海に浮かぶ島。現在はフランスに属するが歴史的にイタリアとの結びつきも深く、コルシカ語もイタリア語の影響が色濃い。もともと呼び合うようなコルシカ島独特のポリフォニック(多声)な歌を生かした作曲となっている。また、ソロも多く設定されていて、5人のソプラノがそれぞれの曲の表情を歌い分ける。

E.Kiikaは、フィンランドの歌から。「プロラーマッティ」はフィンランド北部から、ノルウェー、スウェーデン、ロシアにまたがる北極圏の地域、サミー人が多く住む。この歌は、この地域の短い夏を歓び沸き立っているかのような。現代のフィンランドの作曲家コスティアイネン編曲によるAmazing Graceは愛にあふれ温かさで満たされる。続く「三つのマリアの歌」は周藤諭の作品。

ClairとKiikaが共に歌うのは、三善晃と信長貴富の作品。

演奏会を貫くテーマは「愛、母なる愛」とでもいえばいいだろうか。

2年前の夏の岐阜以来、再びの出会いを楽しみにそれぞれが岐阜と京都で自分たちの歌に磨きをかけ、特徴ある演奏をしてきたと言っている。このアルティで、きっと愛ある歌となるに違いない。